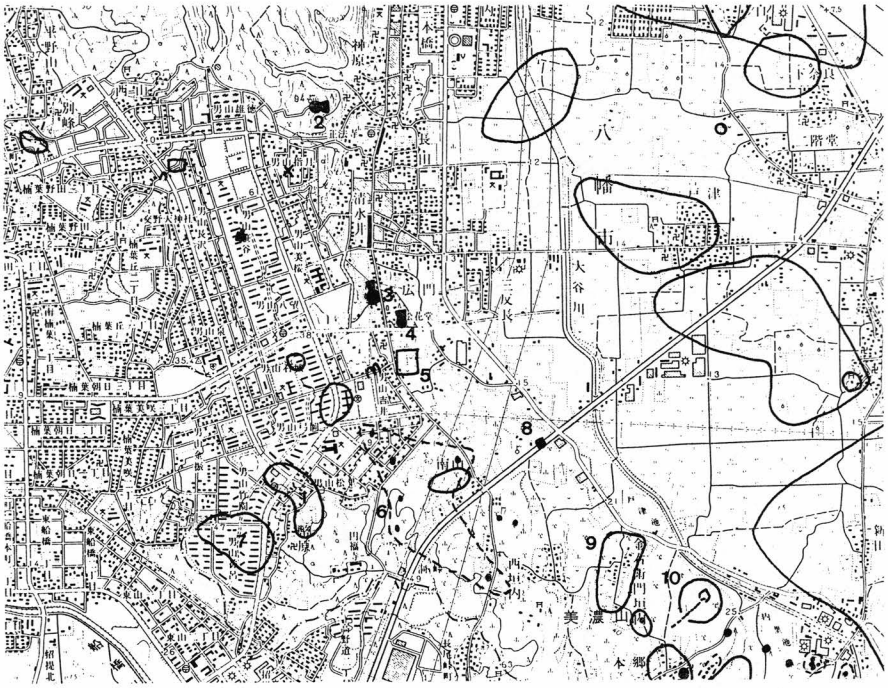
八幡市幣原遺跡出土の土器について

石　井　清　司

1. はじめに

幣原遺跡は，京都府八幡市八幡荘中ノ山に所在する弥生時代の高地性集落遺跡である。この遺跡は，現在では日本住宅・都市整備公団の男山団地内に入ってしまって，すっかり都市化してしまったが，かつては男山丘陵内の山間集落であった幣原集落の東北にあたり，標高50～60mの丘陵の稜線上および南斜面に位置していた。ここは，生駒山地から北に延びる低い男山丘陵(八幡丘陵)のほぼ中央にあり，東側は山城国，西側は河内国である。この遺跡の見晴しの良い場所に立つと河内平野の北部および淀川を越えて北摂平野を望むことができる。

この遺跡は，昭和40年12月から昭和41年３月にかけて，日本住宅公団八幡地区開発計画

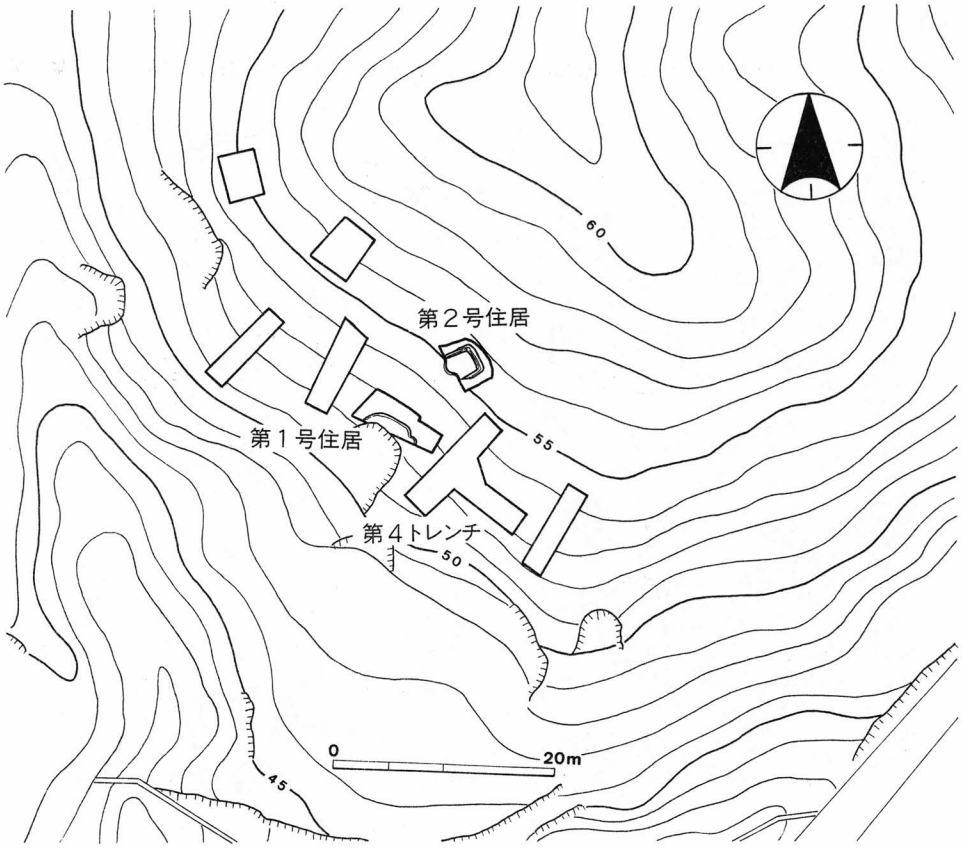


第１図　八幡市幣原遺跡位置図

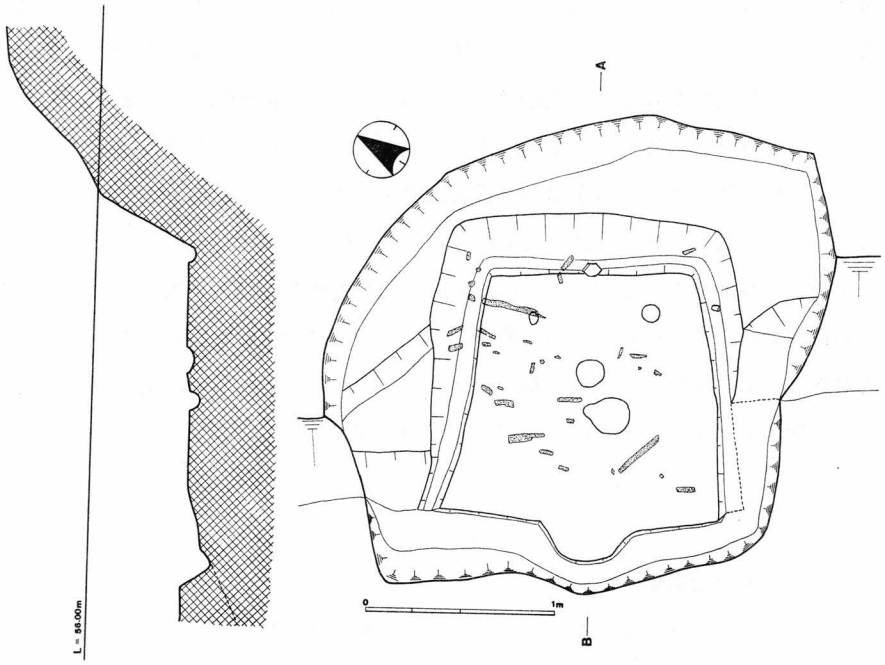
1. 幣原遺跡　2. 石不動古墳　3. 西車塚古墳　4. 東車塚古墳　5. 志水廃寺
6. 南山古墳群　7. 長谷遺跡　8. ヒル塚古墳　9. 金右衛門垣内遺跡　10. 狐谷遺跡

の事前の分布調査によって確認された。当時の分布調査によっても弥生時代後期の高地性集落として注目され，一部試掘調査も実施され，弥生土器，石匕などが採集された。(注1) さらに，昭和42年11月から昭和43年10月まで同公団の委託によって京都府教育委員会が行った八幡丘陵地所在遺跡の発掘調査の対象となった。この調査では，調査地全域が竹やぶとなっていたため，何ケ所かのトレンチ調査や崖面の精査にもかかわらず，弥生土器の包含層が一部で確認されただけで，弥生土器のほとんどが竹やぶの土入れによる盛土の中や開墾によって削られた土の中から出土するのみで，当時の生活面を検出することができなかったと報告されている。(注2)

ところが，昭和45年３月になって，男山団地の工事が本格化したところで，弥生土器が良好な状況で出土したとの報告により，京都府教育委員会で緊急に発掘調査された。調査の結果，２基の竪穴式住居が検出され，まとまって弥生土器が出土した。この資料の一部は，江谷寛氏(注3)によって手焙型土器が紹介され，さらに都出比呂志氏(注4)によって南山城地域に



第２図　幣原遺跡トレンチ位置図



第3図　第２号竪穴式住居跡平面図

おける高地性集落の一例として，また土器の分析により近江系土器との関連など注目される資料として紹介されている。

しかし，これらの良好な一括資料として注目される幣原遺跡の土器の詳細について公表されたものがない。今回，調査担当者の高橋美久二氏のすすめもあり，昭和59年に土器の整理を行い，検討を加えたものである。

なお，幣原遺跡の土器については，当埋蔵文化財調査研究センターが進めている共同研究「京都府下における弥生土器の編年」の資料として整理，実測を行ったものである。

2.　遺跡の概要(注5)

昭和45年の調査によって竪穴式住居跡２基が検出されたのは，幣原集落のすぐ東北の南西向きの急傾斜面である。１号住居跡は，標高53mにある円形住居跡である。この住居跡は丘陵の高い部分側のみが残っており，調査着手時点では，既に大半が削平されていて，径５m以上であることがわかるのみであった。住居跡の残存部で甕形土器の体部片など数点が出土した。この住居跡から出土したとみられるほぼ完形に復元しうる壺形土器があったとのことであるが，すでにもち去られていた。

２号住居跡は，１号住居跡のすぐ上の標高55mにある小型の方形住居跡である。２号住

居跡は35°の急傾斜につくられ，床面の平坦面を確保するために，最大幅3.3m，奥行3.2m，最深部で1m掘り下げてつくられている。住居跡の床面は一辺約3mの方形であるが，斜面の奥側（北東側）で幅2.5m，入口側（南西側）で幅3.4mの平面形が台形を呈する。周囲には幅0.15～0.2m，深さ0.1mの壁溝がめぐるが，入口側の辺では壁溝は検出されていない。この入口側の辺では，床面が中央で舌状に突出していて，この部分が住居の入口とみられる。この住居は，火事で焼失したものとみられ，床面および埋土中から，一部木材が立った状況でみつかった。このことは，この住居が焼失後，完全に材木が床面に倒壊するまでの間に埋もれたことを示していて興味深い。住居内に埋もれた土砂の中から多量の弥生土器が出土した。今回報告する土器のほとんどは，この2号住居の埋土中から出土したもので，床面から出土した土器は，わずか2点（9，10）にすぎない。

3. 出土遺物

2号住居跡床面出土遺物

2号住居跡の床面には出土遺物が少なく，北側周壁溝に接して鉢（9・10）が出土した。

鉢B（9）は，底部は平底ぎみの丸底を呈し，口縁部は単純「く」の字形を呈する。9は口径7.8cm，器高8.0cmを測り，胎土は黄灰色である。

鉢D（10）は，平底の底部より内彎ぎみに立ちあがる体部へ続き，口縁部は「く」の字形に屈曲する頸部より，短く直立ぎみに立ちあがる複合口縁形を呈する。体部外面はナデ，内面はハケ調整を施す。10は口径11.2cmを測る。

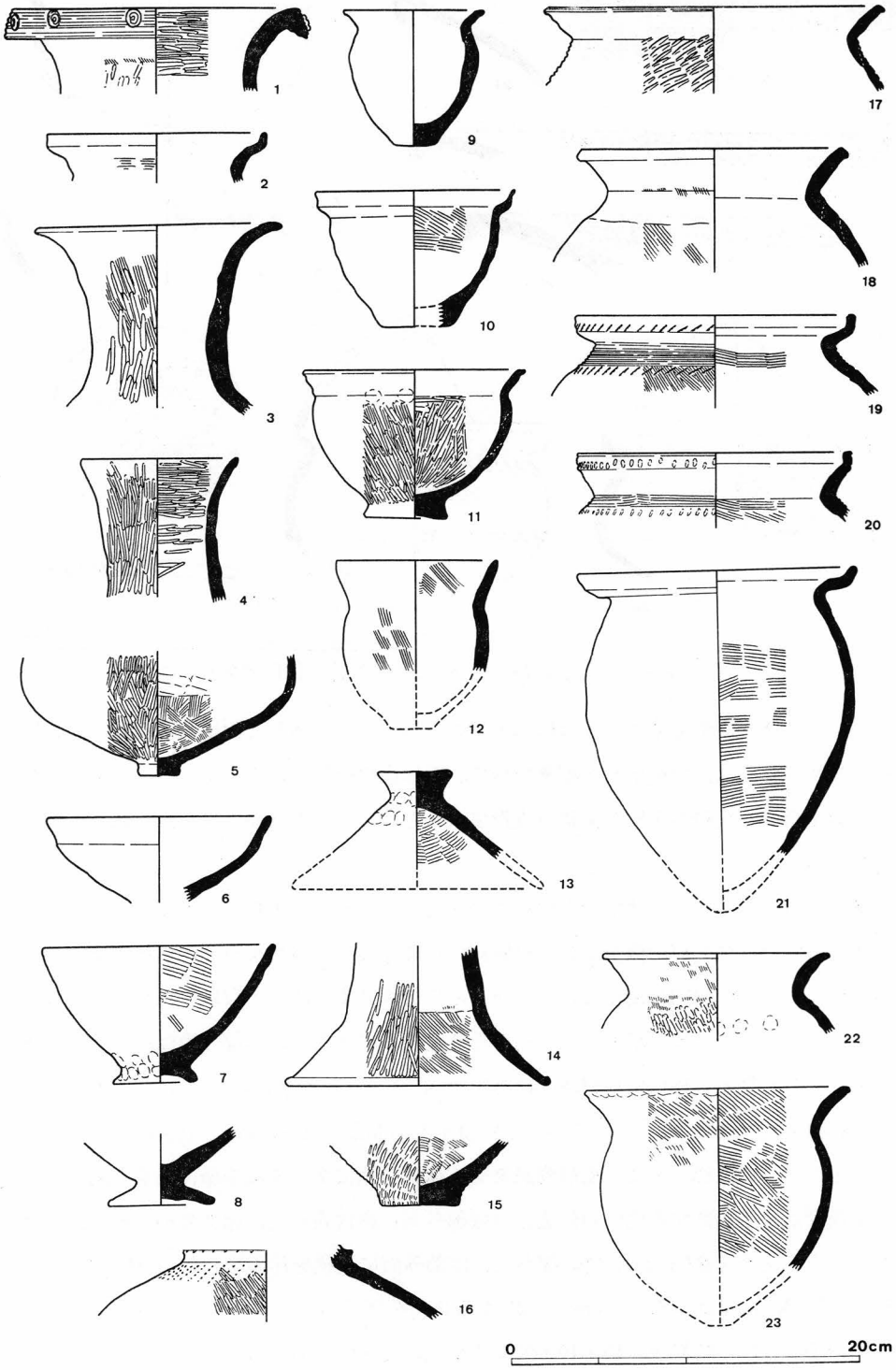
2号住居跡上面，堆積土内出土遺物

2号住居跡では，住居跡が急斜面に立地するため，その上層に厚い堆積土が認められた。同層からはコンテナー・バット15箱以上の土器が出土した。器種は広口壺・細頸壺・鉢・甕・蓋・器台など多種にわたる。

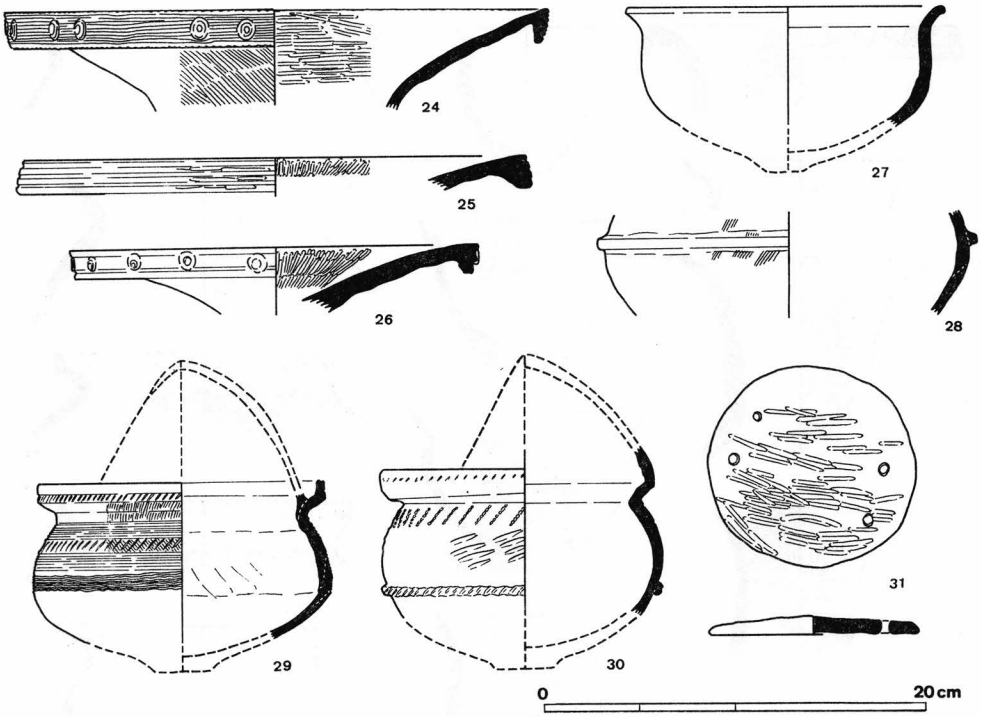
広口壺A（1）は，筒状の頸部より，口縁部はゆるく外反し，口縁端部は粘土帯をつぎたし，下方に垂下させたもので，口縁端部外面には5条の擬凹線文をめぐらしたのち，円形浮文を貼り付ける。口縁部外面は縦方向のハケののち，横ナデあるいは縦方向のヘラ磨き調整を施す。口縁部内面は横方向のていねいなヘラ磨き調整を施す。口径16.0cmを測る。

広口壺B（2）は，筒状の短い頸部より，口縁部は外反したのち，直立ぎみに短く立ちあがり受口状を呈するもので，口縁部外面に一部，横方向のハケ調整が認められる。口径12.6cmを測る。

細頸壺（3・4・5）は，筒状に長く立ちあがる頸部より，口縁部はゆるく外反する。3の口縁部外面は，縦方向のハケののち，縦方向のヘラ磨き調整を施す。4の口縁部内面は横



第４図　　八幡市幣原遺跡，２号住居跡出土遺物(1)



第5図　　八幡市幣原遺跡，2号住居跡内出土遺物(2)

方向のヘラ磨き調整を施す。5は体部下半のみ遺存する。体部外面は縦方向のていねいなヘラ磨き調整，体部内面はハケ調整を施す。5は底部を鉢形に作ったのち，口縁部にむかって粘土帯を順次積み上げる輪積み成形によるもので，体部内面には粘土の貼り付け痕が明瞭である。

甕は，口縁部の形態・体部の調整技法の差異によりA・B・Cに分類できる。

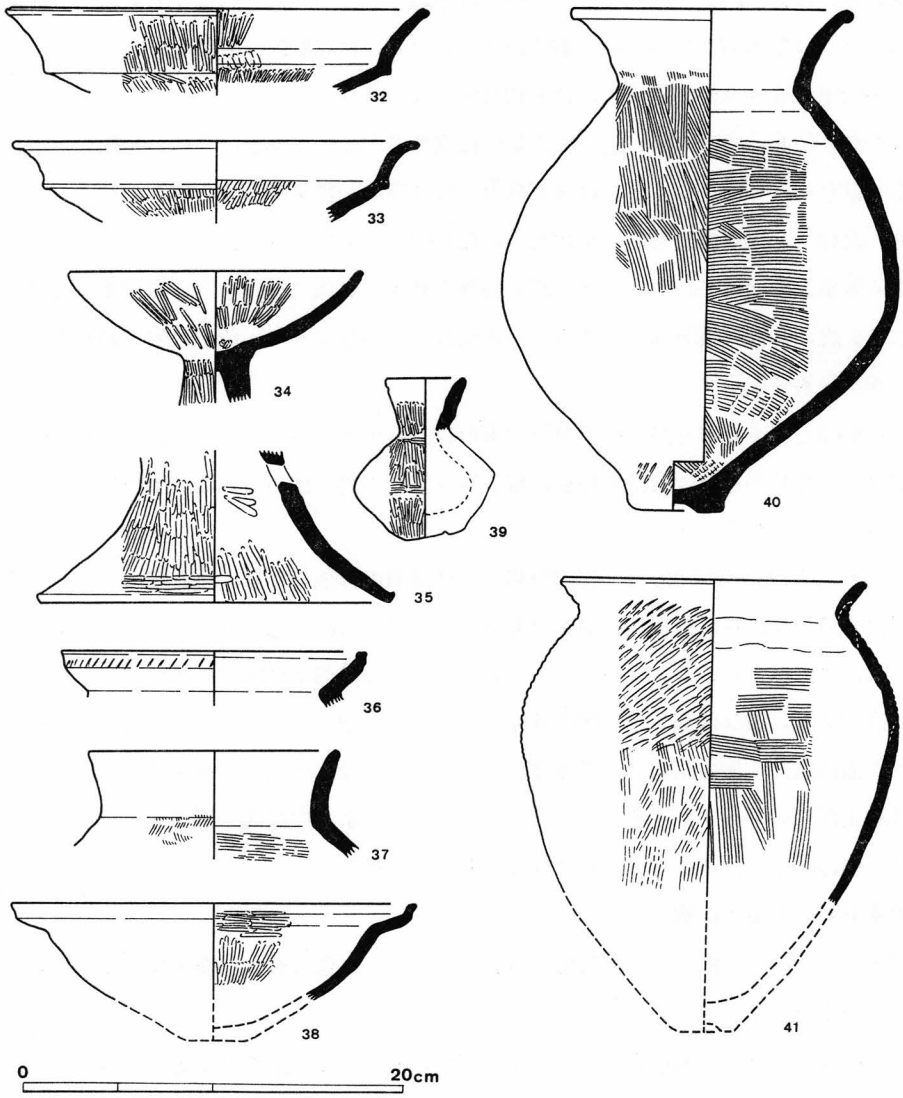
甕A(17)は，なで肩の体部より，口縁部は単純「く」の字形を呈し，口縁端部は，わずかに肥厚させる。体部外面には，右上がりの平行タタキを施す。17は口径18.8cmを測る。

甕B(18・22・23)は，単純「く」の字形を呈する口縁部で，体部外面はハケあるいはヘラ磨き調整を施す。18は口径14.8cm，22は口径12.8cm，23は口径14.5cmを測る。

甕C(19・20・21)は，「く」の字形に屈曲する頸部より，口縁部は直立ぎみに短く立ちあがるもので，口縁部外面には櫛描列点文を，体部外面に7～8条を単位とする櫛描直線文＋櫛描列点文を加飾する甕C_1(19)と，口縁部外面に棒状列点文，体部外面に櫛描直線文＋櫛状列点文を施す甕C_2(20)，口縁部および体部外面に文様を加飾をしない甕C_3(21)がある。19は口径15.8cm，20は口径15.5cm，21は15.6cmを測る。

甕の胎土は17が暗褐色，18・19・20は淡黄色，22・23は明赤褐色を呈する。

鉢は口縁部および体部の形態によりA・B・C・Dに分類できる。



第６図　　八幡市幣原遺跡，１号住居跡内および第４トレンチ出土遺物

鉢Ａ（６～８）は，底部より斜め上方に立ちあがる口縁部へ続き，口縁端部は丸みをもっておわる。脚部は輪状の粘土帯を貼り付けたもので，７は体部と脚部の屈曲部に指頭の圧痕が，内面にはハケ調整が認められる。６は口径12.4cm，７は口径13.0cm・器高7.9cmを測る。

鉢Ｂ(11)は，椀状を呈する体部より，口縁部は単純「く」の字形に外反し，口縁端部を水平ぎみにわずかに肥厚させる。底部は上げ底ぎみの突出した平底である。体部内・外面はていねいなヘラ磨き調整を施す。口径12.5cm・器高8.6cmを測る。

鉢C(12)は，倒卵形の体部より，口縁部は単純「く」の字形に外反するもので，体部外面および口縁部内面には一部ハケ調整が認められる。口径8.9cmを測る。

鉢の胎土は6～8が淡黄灰色，11・12は明赤褐色を呈する。

器台(14・24～26)は，斜め上方に直線的に立ちあがる受け部と，その口縁部の下方に粘土帯を貼り付けて面をつくる。口縁部外面には3条の凹線文をめぐらすもの(25)と凹線文を施したのち，円形浮文を貼り付けたもの(24・26)がある。受け部外面はハケあるいはヘラ磨き調整，内面はていねいなヘラ磨き調整を施す。脚部(14)は中空の柱状部より裾開きとなる。脚部外面は縦方向のヘラ磨き，内面はハケ調整を施す。胎土は24・25が赤褐色，14・26が淡褐色を呈する。

蓋(13・31)は，笠形を呈し把手を付すもの(13)と円形状を呈し2孔一対の円孔を焼成前に穿つもの(31)がある。31は天井部に粗いヘラ磨き調整が認められる。胎土は13が淡黄灰色，31が明赤褐色を呈する。

手焙型土器(28・29・30)は，腰部の張った扁球形の鉢部を呈し，口縁部は「く」の字形に屈曲する頸部より直立ぎみに短く立ちあがる「受け口状口縁」をなすもので，覆部の接合には，口縁部よりそのまま続くもの(30)のほか，口縁部より内面に覆部を貼り付けたもの(29)がある。29は体部および頸部外面にハケ調整を施したのち，体部外面を櫛描直線文＋ヘラ描列点文＋櫛描直線文＋櫛描波状文を配し，口縁部外面にはヘラ描列点文を配する。30は右上がりの平行タタキを施したのち，体部外面および口縁部外面には，棒状列点文を配し，体部下半には粘土帯を貼り付けたのち，ヘラ描列点文を配する。

第4トレンチ出土遺物

第4トレンチでは顕著な遺構は検出されなかったが，包含層より壺・甕・鉢・高坏・器台などが出土した。

広口壺A(40)は，体部最大径が中位より下半にあり，長胴形を呈する。口縁部はなで肩の体部より外反ぎみに立ちあがり，口縁端部を外方にわずかに肥厚させる。底部は突出ぎみの平底である。体部外面は縦方向の，内面は横方向のハケ調整を施す。底部外面には一部右上がりのタタキ目が認められる。40は口径14.2cm・器高26.2cmを測り，胎土は淡黄灰色である。

直口壺(37)は，口縁部のみ遺存する。なで肩の体部より，口縁部は直立ぎみに立ちあがる。体部外面は縦方向の，内面は横方向のハケ調整を施す。37は口径12.6cmを測り，胎土は淡黄灰色である。

甕A(41)は，倒卵形の体部より，単純「く」の字形に屈曲する口縁部へ続くが，口縁部の立ち上がりは短い。体部外面は右上がりのタタキを施したのち，下半のみ縦方向のハケ

調整を加える。体部内面は縦あるいは横方向のハケ調整を施す。41は口径15.6cmを測り，胎土は淡黄灰色である。

甕C(36)は，単純「く」の字形に屈曲する頸部より，直立ぎみに短く立ちあがる受け口状口縁形を呈する。口縁部外面にはヘラ描きの列点文を施す。36は口径 15.5cm を測り，胎土は淡黄灰色である。

鉢E(38)は，半球形の体部より，「く」の字形に屈曲する頸部へ続き，口縁部は直立ぎみに短く立ちあがる。外面は遺存状態が悪く調整不明，内面は体部および口縁部ともていねいなヘラ磨き調整を施す。38は口径21.0cmを測り，胎土は明赤褐色である。

高坏A(32・33)は，斜め上方に立ちあがる坏部より，口縁部は外反ぎみに立ちあがる皿状を呈するもので，坏部内・外面とも縦方向のていねいなヘラ磨き調整を施す。32は口径21.3cmを測り，胎土は暗褐色，33は口径21.0cmを測り，胎土は淡黄灰色を呈する。

高坏B(34)は，柱状部より内彎ぎみに立ちあがる浅い椀状を呈するもので，脚部は中空である。坏部内・外面，脚部外面はていねいな縦方向のヘラ磨き調整を施す。34は口径15.3cmを測り，胎土は明赤褐色である。

器台(35)は，脚部のみ遺存する。中空の柱状部で裾開きとなり，柱状部には焼成前に円孔を穿つ。脚部内・外面はヘラ磨き調整を施す。35の胎土は淡黄灰色である。

小型壺(39)は，扁球形の体部より，口縁部は細い頸部より斜め上方に長く立ちあがる細頸壺である。体部および口縁部外面は，縦方向のヘラ磨きを施したのち，一部横方向のヘラ磨き調整を加える。39は口径4.0cm・器高8.5cmを測り，胎土は淡褐色である。

4. 2号住居跡出土土器の組成およびその胎土

幣原遺跡出土の土器は，第4トレンチの包含層内出土土器(32～41)を除き，その大半は2号住居跡内より出土した。

2号住居跡内出土遺物は，住居跡上面の厚い堆積土内より出土したものが大半であり，一括資料とするには疑問があるが，これまでの弥生土器の編年観からみると，大差がないと考えるため，ここでは住居跡上面の資料を含め，2号住居跡出土遺物として検討を行う。

幣原遺跡2号住居跡出土土器は，口縁部を基準として土器組成をみると，52個体を数え，その器種の主体は甕であり，次に壺，台付鉢と続く。

甕は，口縁部が単純「く」の字形に外反するもので，体部外面にタタキ目を残す甕A，口縁部が単純「く」の字形に外反し，体部外面にハケ調整を施す甕B，受け口状口縁形を呈し，体部外面にハケ調整を施す甕Cがあり，甕Aが3個体，甕Bが7個体，甕Cが5個体を数え，その他として3個体がある。甕の底部をみると，体部外面にタタキ目を残すも

のが5個体，体部外面にハケ調整を施すものが30個体であり，前者は甕Aに，後者は甕B・甕Cとともに甕Aの一部に帰属するものと思われる。

壺は広口壺A・B，直口壺，細頸壺などがあり，複合口縁形を呈する壺が3個体，細頸壺が3個体，他には1～2点を数えるのみであり，主体となる器形は限定できない。

高坏は4個体をかぞえ，坏部が椀状を呈する高坏B(34)の1個体を除き，他の3個体はいずれも浅い皿状を呈し，口縁部が外反ぎみに屈曲する高坏Aである。

器台・鉢などは細片のものが多く，個体数は判然としない。

2号住居跡出土土器の特徴として，甕の5個体とともに，近江地方にその分布の中心が知られる手焙型土器が4個体あり，2号住居跡出土土器の17.3%が近江系土器(注6)と考えられる。

幣原遺跡出土土器の胎土は前述したように明赤褐色系を呈するAタイプ，黄灰色系を呈するBタイプ，その他のCタイプに分かれ，Aタイプの一部には表面に赤色土を塗布したものを含む。器種・器形別の胎土の差異を統計処理することは，細片が多く，体部および底部を同一個体とする可能性があるものがあるため困難であるが，全体的な傾向は把握することができる。すなわち，壺は1の広口壺を除き，口縁部片ではBタイプが主体となるが，体部および底部片ではAタイプも目立つ。甕は甕A・甕CがBタイプを主体とするのに対し，甕Bの大半がAタイプである。高坏はその大半がAタイプであり，鉢はA・Bタイプが混在する。これに対して器台および手焙型土器の大半はBタイプである。

幣原遺跡出土土器の胎土の差異については，生産地の相違も考えられるが，特殊例として壺の体部と思われる破片では，Aタイプの胎土とBタイプの胎土がサンドイッチ状に混在しているものがあり，一方を在地産の，他方を搬入品と考えるよりも同一地域においてA・Bタイプの土器を生産したものと思われる。

5. ま と め

幣原遺跡の調査は数次にわたって行われ，昭和45年度には，緊急の発掘調査ではあったが，2基の竪穴式住居跡が検出された。2基の竪穴式住居跡は急斜面を削平して構築された高地性集落であり，特に遺存状態のよかった2号住居跡では，南西部に一部張り出した入口部があり，特異な住居構造として注目される。

幣原遺跡出土の土器，特に2号住居跡の上面の堆積土から出土した遺物は，壺・甕・鉢・蓋・手焙型土器など多種にわたり，第V様式の標式資料として注目される。壺は幣原遺跡の内でやや古相を呈する広口壺A(1)のほか，新相を呈する広口壺B(2)・細頸壺(3～5)がある。甕は山城・河内・摂津地域でその分布が知られるタタキ技法を多様化した甕(3)

のほか，近江地域にその分布の中心が知られる甕Cがある。甕Aについては，完形に復元しえるものがあり，第V様式の後半と考えられ，甕Cは，口縁部および体部外面の装飾方法により第V様式の後半以降と考えられる。高坏は，第V様式の中葉以降に盛行する高坏Aのほか，高坏Aよりやや新相を呈する高坏Bなどがある。このように壺・甕・高坏ともやや時期幅が考えられるが，第V様式の後半に位置づけられる資料と考えられる。

ここでは幣原遺跡出土の近江系土器に着目し，さらに検討を加える。

近江系土器は先述のように甕・手焙型土器がある。甕は19にみられるように口縁部の屈曲が明瞭であり，口縁部外面に櫛描列点文を，体部外面に櫛描列点文＋櫛描波状文を施すものが幣原遺跡の内では古相を呈する。19より新相のものとして20・36がある。20は口縁部および体部外面に棒状列点文を，36は口縁部外面にヘラ描列点文を施したものである。これらの近江系の甕を近江地方の編年案にあてはめると，19は中西常雄(注7)における編年案でいう「青灰色土層式」に，20・36は「黒褐色土層Ⅰ式・黒褐色土層Ⅱ式」に相当し，他の土器とは矛盾しないものである。手焙型土器は覆部の接合方法により2種に分かれ，口縁部より内側に覆部を接合するもの(29)と口縁部から覆部へとそのまま続くもの(30)がある。口縁部および体部外面の装飾は，29では口縁部外面に櫛描列点文を，体部外面には櫛描直線文・櫛描列点文・櫛描波状文を交互に配し，19の甕と近似した時期の手焙型土器である。30は口縁部および体部外面に棒状列点文を配し，腰部には粘土帯を貼り付けたのち，刻み目を施したもので，甕20・36の時期に相当する手焙型土器である。

京都府下における近江系土器の出土例は，北部では峰山町扇谷遺跡より，南部では木津町大畠遺跡までの広い範囲に及び，その時期も第Ⅱ様式より布留式併行期までと幅が広い。

ここでは第V様式に限定して，その分布をみると，桂川左岸の京都市域(岡崎遺跡周辺)，山科地域(中臣遺跡周辺)，桂川右岸(長岡京域周辺)，八幡丘陵(幣原遺跡周辺)，亀岡盆地(北金岐遺跡周辺)にその分布が知られ，特に宇治川・淀川流域には近江系土器を出土する遺跡が点在する。

各遺跡における近江系土器の比率については公表された資料が少なく，向日市中海道遺跡(注8)・同森本遺跡(注9)・長岡京市今里遺跡(注10)・高槻市安満遺跡(注11)・亀岡市北金岐遺跡(注12)などが知られるのみである。

中海道遺跡では溝状遺構内より甕52個体に対して，近江系土器が3個体(5.7%)をかぞえるのみであり，森本遺跡でも甕における近江系土器の割合は6%と少量である。これに対して今里遺跡では，甕における近江系土器の割合が52.8%をかぞえ，その内には甕C_2と分類された搬入品も含まれている。安満遺跡では甕110個体に対して近江・山城系と考えられる甕Eが29個体(26.4%)であり，北金岐遺跡では甕638個体に対して近江系甕が75

個体(11.8%)である。幣原遺跡では先述のように甕における近江系土器の割合は18.3%，総個体数における近江系土器の割合は17.3%である。

このように各遺跡では搬入品を含めた近江系土器の割合は中海道遺跡・森本遺跡の10%未満のもの，安満遺跡・北金岐遺跡・幣原遺跡の10%以上，30%未満のもの，今里遺跡の50%以上のものなど差異がある。これら各遺跡における分類方法については報告者の主観に左右される部分があるが，それらを考慮しても今里遺跡の土器比率は特異である。近江系土器の多寡については地域間交流・通婚圏の有無などが考えられるが，搬入品を多く含むことより，今里遺跡の集落が近江からの影響が特に強い集落であったものと考えられる。

（石井清司＝当センター調査課調査員）

注1　京都大学考古学研究会「八幡丘陵地遺跡分布調査報告」(『第17とれんち』)　昭和41年。

注2　堤圭三郎・高橋美久二「八幡市丘陵地所在遺跡発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1969　京都府教育委員会)　昭和44年。

注3　江谷　寛「手焙型土器の再検討」(『古代学研究』第59号　古代学研究会)　昭和46年。

注4　都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係一淀川水系を中心に一」(『考古学研究』第20巻，第4号)　昭和49年。

注5　本報の遺跡の概要は，高橋美久二氏の御教示によるものであり，第2図トレンチ配置図，第3図第2号住居跡平面図は高橋の了承を得て掲載するものである。

注6　幣原遺跡における近江系土器の割合については，都出比呂志氏が計測されておられるが，同氏が計測を行われた時点では，土器の接合作業が不十分であったため，接合作業の終了後では，若干，計測に誤認があったものと思われる。また，筆者の計測では，口縁部を対象として，個体数の計測を行ったため，体部片からみると，明らかに近江系土器が増加するものと思われる。

注7　中西常雄『北大津の変貌』1979年。

注8　高橋美久二・森　毅ほか「中海道遺跡発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第3集)　向日市教育委員会，長岡京跡発掘調査研究所　1979年。

注9　都出比呂志『向日市史』上巻，一第2章　弥生時代一，京都府向日市，昭和58年。

注10　高橋美久二・吉岡博之ほか「長岡京跡　昭和53年度　発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概要』1979　京都府教育委員会)昭和54年。

注11　原口正三・森田克行『安満遺跡発掘調査報告書　一9地区の調査一』(『高槻市文化財調査報告書』第10冊　高槻市教育委員会)昭和52年。

注12　石井清司・田代　弘ほか「北金岐遺跡発掘調査報告書」(『京都府遺跡調査報告書』第5冊，(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1985年。